



## 安井息軒没後140年 川口交流花盛り

時は明治9年9月23日、東京の土手三番町の畳数143枚の最後の三計塾で、幕末から明治初頭の知の巨人、安井息軒は長女須磨子やたくさんの弟子たちに看取られながら、静かに息を引き取りました。

三計塾は千駄ヶ谷の飢肥藩下屋敷を皮切りに20回場所を移ったと言われます。どんなに凄い学者になっても驕り昂ることなく清貧を貫いた安井息軒は、特に初期は金銭的にゆとりがなく、飢肥藩の屋敷などを借り、塾生が増えて手狭になると、広い場所を求めて場所を移していきました。せっかくなが入っても火事に遭い、家財をなくし、移転を余儀なくされたことも3度ありました。

14番目の三計塾は、東に江戸城外苑から遠く海を、西には富嶽を望み、自ら「海嶽楼(かいがくろう)」と名付け、大変気に入っていましたが、火事で焼けてしまいました。

17番目は安井息軒が戊辰戦争の時に疎開した武蔵の国領家村(今の埼玉県川口市)で、その後彦根藩井伊家から安井息軒の著作「左伝輯釈(さでんしゅうしゃく)」を出版させて欲しいという願いがあり、同藩の代々木の別邸へ移りました。その後、飢肥藩臣籍に戻ったので、伊東家は19番目の三計塾として200人余り収容できる部屋を用意し、礼を尽くして息軒を迎えたとのことです。

その中で、17番目の三計塾に数えられる武蔵の国領家村での9か月間の息軒が紡いだ縁で、没後140年に当たる現在に至るまで埼玉県川口市との交流が続いているのです。

幕末から明治へと時代が移るこの時期、息軒の弟子たちは、息軒やその家族の身の安全を気遣い、盛んに江戸を離れて疎開をするように勧めます。

そんな時にたまたま新築したばかりの弟の家が今空き家になっているからと申し出たのが、後に弟子となる領家村の豪農、高橋善兵衛でした。この家が今も大切に残されている「息焉舎(そくえんしゃ)」です。この間、息軒は常に江戸や家族の状況を気遣いながらも、「北潜日抄」や「息焉舎記」を書いて貴重な記録を残し、著作を見直し、弟子を育てます。こうしてまい種が結実し、今でも川口市との交流が続いているのです。素晴らしいことです。(文責：川口)



宮崎空港でお出迎え



市役所での市長表敬訪問



県庁・物産館訪問



飢肥・振徳堂での学習

## 谷干城の愛刀は井上真改作だった!!



西米良村で名刀が一堂に集う展示会がありました。そこに展示されていた谷干城の刀は、何と木花所縁の刀工、井上真改作の名刀だとのこと。真改は、木花西教寺出身、関西で修業し活躍した名工、國貞の次男

で、菊の御紋を入れるのを許されるほどの腕前でした。本館も真改の刀を一振り所蔵しております。谷干城は息軒の一番弟子で西南戦争時、熊本鎮台の司令官として大活躍し、後に大臣を務め、安井家のためにも尽力した人物です。何らかの縁を感じた今回の新着情報でした。

### 収蔵の逸品シリーズ(2)

#### 永野勇七「西南役従軍記」

今回は、上中野の士族・永野勇七が記した「西南戦争従軍記」(本館蔵)を紹介します。この史料は、明治10年(1877)の西南戦争から38年後の大正4年(1915)に記されたものです。『清武町史 資料編1 通史関係資料』には、単なる回想文ではなく、当時書かれた自筆メモを見てまとめたものであるとし、戦争を記録した貴重な史料として紹介されています。

西南戦争における清武士族の出兵者は227名で、中野神社の境内に建てられている戦没者碑には37名の姓名が刻まれています(『清武町史 通史編』)。この清武隊の動向として、阿萬怨(じょ)三郎の口述書には、高橋元安隊に属して2月19日に出発し、熊本から川尻・山鹿を転戦したことが記されています(小寺鉄之助『西南の役薩軍口供書』)。

一方、永野勇七の記述によれば、初め鹿兒島に向かっていたが都城の手前で引き返し、2月14日に清武を出発、延岡・三田井(高千穂)・高森経由で熊本城下に着いたとあります。その後、山鹿の戦いに参加した後、二番大隊の三番小隊の応援に行き、鳥巢(現合志市)の台場を奪回したことが記されています。また、2月15日の山鹿での戦闘の様を描いた絵図には、多くの兵士が倒れた様子が描かれ、戦闘の凄まじさが表現されています。

隊の人数や月日など、必ずしも明確ではない記述もありますが、従軍兵士が経験した戦場の有り様を伺い知るものとして貴重な史料と言えます。(文責：今城)

### 《きよたけ歴史講座のご案内》

9月24日(土)10:00~11:45 講師：安井息軒顕彰会 岩切 哲氏「清武の偉人と史跡」

《秋のミニ展示》10月1日(土)~11月20日(日) 「飢肥隊 熊本・山鹿の戦い」

~永野勇七著「西南戦争従軍記」から~  
9時~16時半開館、毎週月曜日並びに祝日の翌日は休館日。